

あそ

6

2007



正平鐵筆



觸処生厓
山田正平

あを

六 月

あを

無 題

さざんかを夜もこぼせる遊びせむ
凧を吹きわけてゐる高みかな
追羽子の雙手をあげて落ちてゆく
おにぎりのまんまなかのおかあさん
平泳してゐる春の錦鯉

東京 佐藤喜孝

客待のクレープ屋台花の下
桜湯の喉越しやさし夕茜
小魚の群れ来る春の潮だまり
瑠璃色の器にもりし桜漬
佐保姫の北国に着く便りかな

東京 森山のりこ

花ひらくけはひのありぬ鸚哥群れ
何処からか花びら四五枚池動く
若楓そよそよそよと枝伸ばす
狼はいつも悪役黄砂降る
撫子や早すぎましたおさわさん

東京 森 理和

大国主神から卑弥呼に届く早苗かな
稲刈つて卑弥呼と食べる麦焦がし
はらはらとちらちらと散る夕霧忌
初櫻 上^{ほっ}枝^え 下^し枝^ず 来^え 鴨 飛 来
初櫻いそがしきままだ暮かな

東京 吉弘 恭子

影法師

埼玉 渡邊友七

枢が眺るげんげ田の果て一生家
ネクタイを引抜き春愁掌中に
とぶ蝶を眼で追ひ乳房はなさぬ子
焦げくさき陽の柿若葉湖透かせ
花冷や灯ともす母の影法師

東京 赤座典子

春の風邪五種の葉を振舞はる
囀の途切れるあたり投票所
きみもずいぶん飲みましたねと桜餅
江戸東京博物館
春御輿草鞋を直す紙人形
鳩の恋敗者下りて見詰めをり

東京 安部里子

朝まだき白鼻心に猫家に入れ
古代杉大きな祠地底まで
つつじ山火の玉のごと西日受け
花冷や地蔵通りの母に会ふ
水温むとげぬき地蔵蒸まんとう

青空のまま暮れかかる春の海
夕刊のなかなか来ない春の闇
お隣も一人住まゐるや菜種梅雨
身のまはり少し片附けリラの冷え
あゝ言へばこう言ふ子にも嫁菜和

神奈川

鎌倉喜久恵

カサブランカの香りどこまでも春愁
花冷や渡る廊下の黒光り
花の雨安らぐ時を得て独り
ここからは私道春泥なつかしく
木の芽風衿吹き抜けて女坂

神奈川

木村茂登子

被災地のシートの青し花筵
隅田川鷗も花に羽休め
手折れずや荅もいとし桜草
角すぎて手をつなぎけり柿若葉
コンビニの弁当二つ花疲れ

東京

斉藤裕子

快速の停まらない町春疾風
不似合な薔薇を貫ひて退職す
蒲の芽や池にせり出すレストラン
黒船橋から猪牙でくり出す花見かな
春愁や乳房を挟むマンモグラフィ―

東京 篠田純子

花筏組みて崩るる水明り
大山すみ祇花の底なる瀬戸の潮
ひやひやと頬に寄りくる桜東風
古ひいな笑まひふるびず緋毛氈
春の宵枝を鳴らさぬ世を願ふ

東京 芝 尚子

東京 芝宮須磨子

神田川淀みに逆る花筏
春燈や眞砂女嫌いと云ふ人と
知らされてカリンの花の美しきこと
櫻咲き愛といふ子の教職に
散る櫻川面眞白に流れゆき

石川 定梶じょう

目借時魔法のめがね掛けしより
てのひらに擦つたくてこんぺいとう
遠くなる春雷女医が青年診る
行く限りかたへ薄暑の塀つづく
風力発電南風に負くまじ回りけり

静岡

山笑ふ寸又峽温泉眠たげに
吊橋をゆらりゆつくり山桜
S L のもくもくもくと花の昼
ふくらみぬ天まで続く茶の畑
久能山千百段に花ふぶき

埼玉 須賀敏子

枇杷を伐り潮ぐもりなり安房の国
砂浜をあるく鳥ゐるおぼろ月
春立つや施設の昼食旬のもの
鴉らも恋をしてゐる花の空
真砂女逝き安房鴨川の花ぐもり

東京 鈴木多枝子

梅雨兆す

埼玉 竹内弘子

戸袋に指はさまるる朝寝かな
ゆつくりと降りる終点春ふかし
花萼に芳香のあり投票す
別々に来て旧知めく田芹摘
梅雨兆す架線工事の火花散り

花月夜

東京 田中藤穂

新しき靴履いてきし花の客
仰ぎつつ落花の渦へ歩み入る
新幹線迫りてきたる春の富士
思ひ出が墓標たんぽぽ咲きふゆる
黄ばみたるピアノ鍵盤花月夜

東京 東 亜 未

柿若葉はらぺこ青虫穴明ける
点滴をじつと見つめる桜貝
大方丈三方開放若葉かな
十三詣少女真顔の渡月橋
山椒の芽足けんけんを繰返す

山 里

三 重 長崎桂子

春蘭や行基の寺の石組に
雪解光古刹の笥あふれぬる
えびね咲くかの簪のいとしくて
春嵐赤古里チヨゴリの裾をもてあます
行く春や銃は残酷夢であれ

春

雛芥子にホースの水を弱めたり
はじめから牡丹の蕾数へ出す
三百年樹齡は重し糸ざくら
春の湖ヨットの帆布新しき
溜りたる新聞を繰る春愁

埼玉 早崎泰江

泰山木の花潔白で押しとほす
母の日の花束妻を素直にす
瀧の音とほくてちかし霧ふすま
日光を通りすぎたる梅雨の蝶
父の日の僅かな望みあるやなし

東京 堀内一郎

人句

一葉の井に冷し瓜など為たし

佐藤喜孝

とりあへず蕎麦を食べんと更衣

堀内一郎

折り畳む杖をバツクに桜狩

森山のりこ

二の丸のがらんと広く長閑なり

森理和

雲漢にながるる薄墨桜かな

吉弘恭子

身を馳けるものあり眩し花辛夷

渡邊友七

花あせび乾切つたる手水鉢

赤座典子

お彼岸や孫のみやげに万華鏡

安部里子

さくら咲きやうやく心足るやうな

鎌倉喜久恵

春嵐自転車盾に立ちつくす

木村茂登子

日を置いて書かれし葉書春の雪

斉藤裕子



4月作品

にんげんに番号のあり獺祭	篠田純子
人と来て道を覚えぬ鳥雲に	芝尚子
花かすみ左様に白き道を行く	芝宮須磨子
春愁の水尾に曲れるところあり	定梶じょう
観梅をへそまんじゆうで終りけり	須賀敏子
ふる雪の水に溶けゆくとき蒼し	鈴木多枝子
六階の人と目が合ふ春の宵	竹内弘子
土筆煮て枝葉末節気にかげず	田中藤穂
金雀枝や夢に起こされ夢忘る	東亜未
水道の勢ひ余る春の水	長崎桂子
三月の光椿の葉を磨く	早崎泰江

喜孝 抄



五月作品より

竹内弘子・佐藤喜孝

郎女に植疱瘡が生ビール

佐藤喜孝

今年になってから大人のはしか（麻疹）が流行して、あちこちの大学が休校というさわぎになっている。天然痘の予防のために、生後一年と入学以前に牛痘を二回接種して一生の免疫を得る。上腕部に何時までも「あと」が残るので肩にちかく植えることになったようだ。此処の「郎女」はあまり若くなさそうで面白い。

明治の初期から春に行われたので「種痘」は春季になっているが、この句の主たる季節は「生ビール」です。（弘子）

とりあへず蕎麦を食べんと更衣

堀内一郎

作者はすがすがしい衣服に着替えた。事のついでに「蕎麦を食べ」に行こうと思ったのでしょう。新宿という場所柄、行きつけの結構な蕎麦処があるにちがいありません。（弘子）

雲漢にながるる薄墨桜かな

吉弘恭子

岐阜県にあるエドヒガンの巨木「薄墨桜」。
花の直径が4〜5センチあるという。天然記念物になっている。ずっと以前ある小説家が口をきわめて称揚していましたが、私はまだ見たことはありません。

まず、天の川や銀河、銀漢ではなく「雲漢」としたところがいい。雲漢と散りゆく「薄墨桜」が渾然一体となつて、冷たい夜気の匂いや、「幽玄」とでもいうべきものを醸し出しています。（弘子）

春愁の箸折りて出づ軽食堂

渡邊友七

食事を終るといま使った割箸を折る人がいる。そのまま置く人、箸袋に戻す人などさまざまだ。「春愁」に仮託したものは、やや鬱屈にちかいかいものように受け取れました。（弘子）

花あせび乾切つたる手水鉢

赤座典子

典子さんには「花あせび磨硝子めく硬き音」が既にある。あせびの花の触感を直截に捉えたのだが、掲句は前句の推敲の結果と思われる。「乾切つたる手水鉢」と「馬酔木」が出会うことで、作品と昇華した。(喜孝)

さくら咲きやうやく心足るやうな

鎌倉喜久恵

しばらくまえ、百五歳になられるご母堂を見送られた。長寿でいらしたため、喪失感も深いのではないかと思いました。

毎年ともに見て過ごした「さくら」が咲いて、ようやく心の空白が充たされてゆくように感じられたのでしよう。(弘子)

日を置いて書かれし葉書春の雪

斉藤裕子

「葉書」ですから、書きかけで日が経ったというより、書かずに日を過ごしてしまったという感じです。ようやく書いて投函したのは作者ではなく、作者に宛てて葉書を書いた人ではないでしょうか。「書かれし」でそう感

じました。「春の雪」と葉書の映りがいいと思う。心待ちにしていた便りなのでしょう。(弘子)

にんげんに番号のあり獺祭

篠田純子

この句を読んですぐに次句を思い出した。

認識票はづすことなし汗の胸

高島 茂

認識票肌になかりし今朝の秋

兵役時代の句と晩年の句である。兵が怪我をした時の為血液型が刻字されていたり、死語の遺体識別に使う目的らしい。この二句の間には四十年という歲月があるが、年月が経つても忘れ難い認識票の感触。

「にんげん」といえば大変広範な謂になる。ここではいま生きる日本人を指した「にんげん」であろう。年金番号とか住民票コードとか個人識別をするためにいろいろ番号がついている。名前の一部と思えばなんの不都合も感じないのだが、権力者にとつてはこんな便利なものはないであろう。先般防衛省が自民党(国家)の政策にどのような発言、行動をしているかという調査をしているというニュースが伝わった。なんともおぞましい行動である。獺が捕らまえた魚を食べる前に並べるのを「獺

祭」というと辞書にある。私にはこの魚がにんげんに思えてきた。不思議な俳句である。(喜孝)

人と来て道を覚えぬ鳥雲に

芝 尚子

何時、何処へ旅をして何を見、どんな道を辿ったかといった事を詳細に覚えている人。さほど詳しくない人、殆ど覚えていない人がいるとすると、作者同様わたしも覚えぬ方なので少しおかしかった。

てきばきとリードしてくれる人に頼って後に蹤いて行くからだと思えます。(弘子)

恋雀トタンの屋根に頬黒し

定棍じょう

3月25日の能登半島沖地震で、いちばん被害が大きかったといわれる輪島門前町にお住まいの方。「屋根瓦が全部落ちた」そうです。(四日後ようやく電話が通じた由)〈四月号佐藤喜孝記〉

大事にめげず作句しておられることに感動を覚えた。巣藁を垂らして人間の住む家の屋根を棲処としている雀。応急のため差し渡した「トタン屋根」に、雀の頬が

黒く見えたのです。(弘子)

捨てられた家の庭にも露の臺

須賀敏子

廃屋なのか、まだ居住可能な家を捨てたのかも知れない。住んでいたお年寄りが居なくなり、荒れるままの家が歩いていると偶にある。「露の臺」を摘み、垣の花をめでもすることも肉を離れた霊への供養になるような気がする。(弘子)

干瓢を甘く煮てをり鳥曇

田中藤穂

栃木県辺りでとれた大玉の真白な干瓢を紐のように剥いてよく乾かしたものを、砂糖と醬油、みりんで、時間をかけて「甘く煮る」。海苔巻の芯、五目ずしの具にもした。あかい銅の箍のはまった鮎桶を出すと子供達が喜んで寄ってきた。上等の海苔と錦糸卵を散らして出来上がりだ。

これ以外ないと思われる「鳥曇」です。(弘子)

漢訳蕪村

(夏の句)

王 岩

夏月清輝里 單騎過淺灘

夏日青山層々緑 一鷺横貫京城飛

若葉層々新緑中 小河西流復向東

即魚寿司信犹遠 茫茫夏日曠野寬

武士草鞋踏清水 潜行寂無声

似覺群山低 茫茫青田緑

ぬけがけの浅瀬わたるや夏の月

夏山や気宇京尽し飛鷺ひとつ

浅河の西し東シす若葉哉

参考：宜陽城下草萋々、
澗水東流復向西。

芳樹無人花自落、

春山一路鳥空啼。

李華・「春行寄乞興」

鮒ずしの便も遠き夏野哉

しづかさや清水ふみわたる武者わらし

山山を低く覚ゆる青田かな

衛藤公子

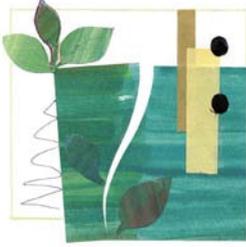
ふんはて
春一番の
砂のまつ



青白人
雪は
ねむりぬ
袋村



柿若葉
路面電車の
窓開けて
須賀敏子



風とともて
至浪が
白くかき
一部



石室の壁に
極彩の
徴
竹内弘子





柳巻の似合ふ横顔秋祭
 謝孝の如合に謝藤林祭

芝 尚子
 尚子



出迎への
 若葉
 マークや
 夏つばめ

須賀敏子



唐がらし
 傷小眉に
 描き道下
 以藤田純子



八月の水晶体に流れ弾

恭子



むつろき日は
 海にあり
 月を見よ
 鎌倉書道



藪の中
 何か喜せり
 秋山路
 森理和

『しむ』のこと



定梶 じょう
じょう

俳句作りの上で、読んでターニングポイントとなる句は、そう多くはないでしょうが誰でもある筈です。

私にとってその一つに

鳥渡る着のみの肩や聳えしめ

石塚友二

がありました。「や」の遣い方に驚いたのです。この「や」は明らかに切字ではありません。しかも、「しむ」は難しい言葉だから余りつかわぬ方が、と教わっていましたが尚更です。以降の句作りに随分参考になったことでした。

一般に、「しむ」は漢文訓読調の文に使われるこ

とが多かったようで、現代の詩歌に用いるには手強い助動詞、ということになりそうです。拙作に、煙突が鉄梯を「登らしむ」なる句があつて、活字になった時がっかりしたものでした。

その他、〈対岸の秋の灯人を恋はしむる〉泉田秋硯にしても、「恋はしむる」は成功しているとは思えません。

対して、

いたづきの癒ゆる日知らにさ庭べに

秋草花の種を蒔かしむ

子規

作者の境涯を忖度すれば、この「しむ」は重い。

一方、〈春の暮列柱に身を紛らしむ〉 岡本眸 があります。「紛れず」あるいは「紛らさず」とは言いますが、「紛らしむ」は聞きなれぬ使い方です。あるいは、岡本さんは文語に詳しい方の筈ですので、「紛る」は四段に活用する使い方があったのでしょうか。

最近読んだ中では

枯るるもの枯れしめて不二宙にあり 渡邊友七

に感心しました。枯れきった四辺に配するに聳ゆる富士。鮮やかなものです。

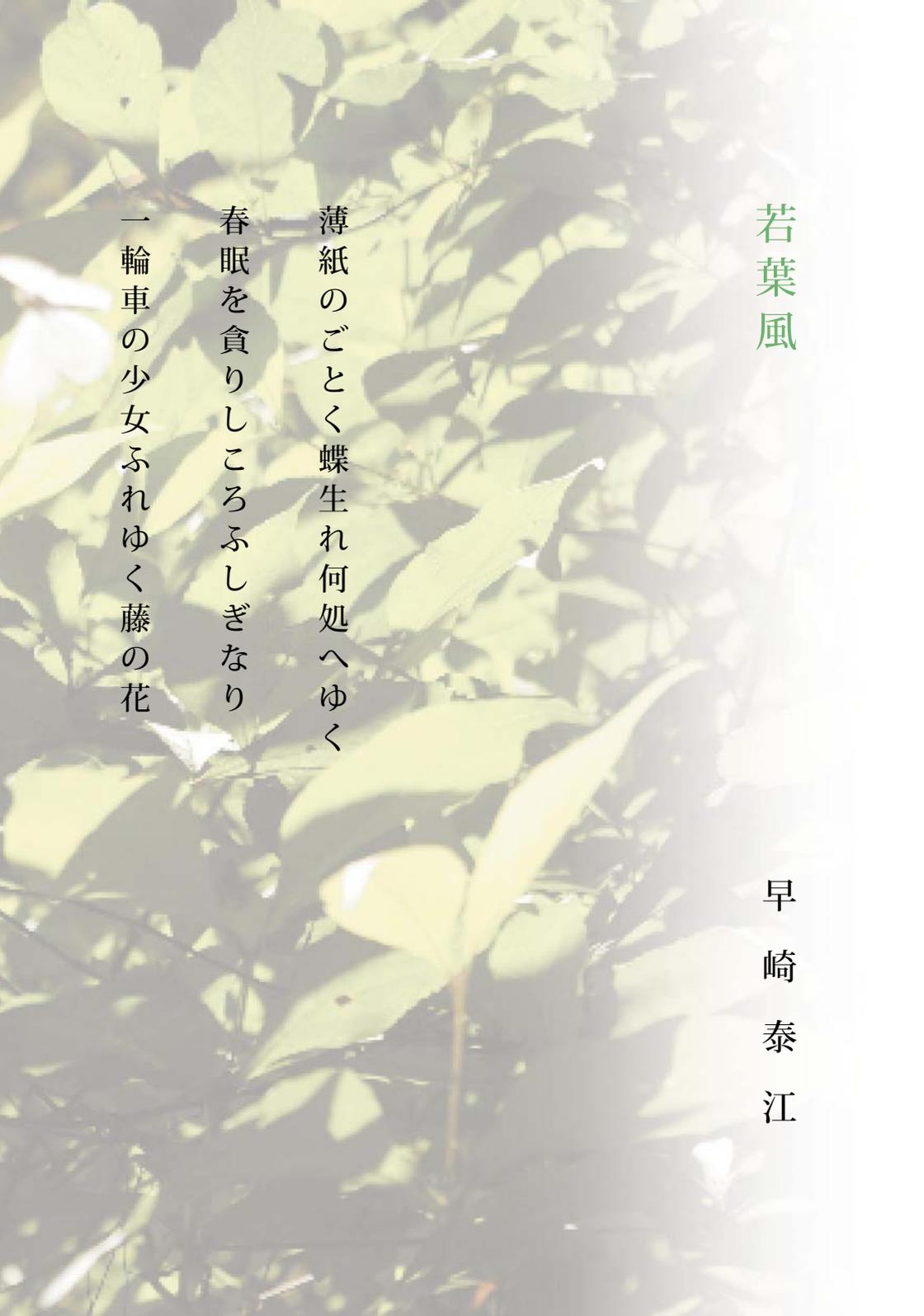
次の句は、ある友人の指摘で気づいたことなのですが、へわが影に入りたる蟻を怠けしむ 片岡由美子の「怠けしむ」に違和感がある、ということなのです。

こういう時は辞書の用例に頼るのが一番です。いくつかの辞典に当たってみた処、「怠く」の例文は全て中世以降のものから採っています。ということは、平安期には詩文には使われなかった、口頭語であつたらう、と見当がつきます。

一方、「しむ」はいわば由緒ある助動詞で、口頭語とは反対の位置にある語。「怠く」に接続するに「しむ」をもつてするのは、袴にアロハシャツを着用するような、たとえば冗談が過ぎましようか。

もつとも、言葉の基準は変わりうるもので、国語学では常識のことですから、「怠けしむ」に違和感をもたぬ方が大勢なら、赤信号の論理で「怠けしむ」でよろしい、ということになります。

ただ、片山さんが『俳句』誌上に以前書かれた文語文法論、これは随分不可解な部分が多いのです。以下については次回に。



若葉風

薄紙のごとく蝶生れ何処へゆく

春眠を貪りしころふしぎなり

一輪車の少女ふれゆく藤の花

早崎泰江

このあたりかをり散り敷く柚子の花

草を食む牛の尻尾に若葉風

鎮もれる老人ホーム夕若葉

若葉風吹くたび見ゆる空青し

底知れぬ緑の森に鴉啼く

椎若葉やさしくなりぬ古墳道

暫くは通ふ道なり燕の巣

鳥雲に

渡邊友七

師不在の会終ふ寒き灰皿重ね

鳥雲に瘦せ煙突の火の粉とび

病も窓を閉ぜず日々かや木の芽雨

地虫出づ禍多き日の（トキ）

鷹去つや泪の如き犬ふどり

桃咲くや心に弱き鬼棲ませ

錠替ふる雨滴のごとく蝌蚪出づつ

甘藷穴の奥に声あつ万愚節

青梅を二つ握りて母恋へり

蝸牛の速度へ幹は従へり



特別作品鑑賞

エジプト

須賀 敏子

ナセル湖

森 理和



吉弘 恭子

初旅はスフィンクスに逢ひにゆく 須賀敏子

題がエジプトなので、本当にエジプトへ行かれたようだ。年の始めに海外旅行に出掛けられて羨ましい限りである。私も行くとしたら先ずスフィンクスに逢いたいと思う。小学校の頃歴史の時間が大好きだった。重機のない時代に巨大なものをどのように作られたかなど小学生の頭では考えられない位の問題を辛抱強く考えたものだった。きっと目の前にあるスフィンクスは素晴しかったのだろう。感情は句上には表現されていないがそれだけに秘められたすばらしさが感じられる。

対岸の駱駝の親子冬青空

この一連の特作を詠むと、船旅のようだ。船の中から向こう岸を悠々と歩く駱駝の親子はさぞ見心えのあることだろう。船と同じ方向に進んでいるのだろう。船足と同じぐらいの速度でゆったりと歩く駱駝を目の前で実際に見たら興奮してしまうと思う。二つある瘤の間にまたがって沙

漠を歩いている絵を小学生の時に描いた。何の障害もない砂の上を歩くという想像でしかないことに気を昂らせて描いた。この句の好きなどころは、下五の青空である。この季語によつて広々とした空間が思われ駱駝の親子の歩く様が伝わってきた。

一月のアブ・シンプルに立ち尽す

アブ・シンプルに立ち尽くすというのだから、声も出ない位の感動が湧き起こったのだろう。知らなかったので、インターネットで調べてみた。1979年に世界文化遺産に登録された岩窟殿遺跡だそう。入り口に四体の巨像がでんと構えている。その内の一体は上半身がなくなっている。どのようなところに立っているのか想像も出来ないが、ダム建設による水没を免れるために七〇坪上に移動させたようだ。大きさを考えると気が遠くなるような話である。この句も、季語が的確に効いている。行った時が一月だからと言われてしまえばそれまでだが立ち尽くすという言葉に一月という語は動かすことができない言の葉である。

ナセル湖に水平線や岩燕 森 理和

水平線が見られるところといえば、海へ行った時に見ることが出来る。ナセル湖に水平線があるのだ。ナセル湖がどの位の大きさかは見たことがないので想像するしかないが、水平線のずつと向こうまで続くだろうと……。中七の「や」でできたこととして作者の驚きが句に十分あ

らわれた。動きのない水平線と、小さな岩燕の取り合わせによって両方とも生き生きとしている。

穏やかにナイルは下る冬夕焼

世界最長のナイル。ミシシッピ・アマゾン・ナイル世界三大河川であるが未だまみえる機会に出会ってない。白ナイルと青ナイルと合してエジプトを通過、地中海にそそぐ六六九〇km。船中泊での旅だとお聞きした。朝夕の景は考えるだけで胸が高鳴る。急流のせまる川を渡るのも緊張感が高まっていいが、大河を穏やかに心静かに渡るのも堪えられないものである。出来れば朝焼けのことも鑑賞してみたかった。

砂かすむ写真のやうにピラミッド

「写真のやうに」と詠んでいるが、やっぱり実際に見ると聞くとは大いに違う。想像していたとうりのピラミッドが眼前に広がった時、「写真のやうに」になったのだろう。寸分違わぬものを見た時の感想がこの表現になった。これ以上の素直な言い表し方が見つからない。砂でかすんでしまつていようがいまいが眼前のピラミッドに対する賞賛には的確な言葉であった。私の外国旅行の候補にエジプトも入れておいた。

あをかき集

東風
田螺
広

堀内一郎 選 (六人目以降五十音順)

東の間の鬚の仙人桜東風 森 理和

鳥海山へ行こうねのまま桜東風

東風吹けりそろりゆるりと池清む

田螺暗く忘るることの息遣ひ

葉脈は綺麗に残す田螺蝻

二の丸の広場を囲み樟芽吹く

間違ひを起こして了ふ田螺かな 篠田純子

覗き込み目玉の写る田螺池

花嫁の荷を出し広間おぼろかな

肝煎で再就職す桜東風

森 理和



桜東風は今まで見たことはない。これは地球温暖化のせいかもしれない。

「桜東風」は今年あちこちの句会で見た。季語が綺麗だから美しさを強調してはいけない。

さりげないか、この作者のように思ってもつかぬ想像の世界が効果をあげる。

「行こうねのまま」ユニークはいいがそれまで。

篠田純子

「間違ひを起こして」と引き寄せて田螺の静寂境に身を落す。これも妙手と言

大櫓と昔を話す東風の昼
東風の匂ふ昔の道をなぞりゆく
春の闇横へよこへと広がりぬ

鎌倉喜久恵

前山のいろ仄めくに桜東風
強東風に髪逆立ちぬバス待てば
気散じに歩けば泥田に田螺這ふ
田螺来る会ひたいといふ文入れて
大佛の背の広きに黄沙降る
さくらちる廣目天の満面に

吉弘恭子

言伝ては東風よりやさしとどきもの
強東風や托鉢僧の二重顎
夕東風や野良猫ちにこゑかけ過ぐるひと
虎造の清水次郎長田螺鳴く
桜東風茶室に正坐外国人
広光は相模の刀工鱗東風
強東風や祖師堂開門午前五時

東 亜 未

える。就職の至難の世である。肝煎に複雑な人間関係が渦巻いている。広間おぼろの空虚感もしみじみと。

鎌倉喜久恵

春の闇は一日の終り、その安らぎが夢の広がりへ「横へよこへと」に作者のときめきが聞こえて来る。出色の作。

「気散じ」小生物が人の救いになるとは。

吉弘恭子

広目天、甲冑憤怒の武将形とある。荘厳と華麗と大らかな雰囲気とを湛える。

托鉢僧の修業と二重顎が象徴する現実が面白く語られる。「広沢虎造」もあつたが狭くなるし。清水次郎長も。

東 亜 未

今は昔泥を跳ねあげ 田螺取
信濃には広き空あり 残る雪
春燈や身軽になりし 広辞苑

赤座典子

東風止みて雀乗りたる 鬼瓦
強東風やドラマの顔の懐しく
広小路 入待顔の花衣
霊園に広き抜け道雀の子
父母参賀広いグラウンド風光る

安部里子

広大な国吹ぬけし 黄塵や
田螺和喰はずぎらいの肝だめし
東風吹いて散歩の犬のくさめする
強東風の花吹雪乗せ川面ゆく
春爛漫真昼の上野 広小路
咄家は末広で蕎麦喰い酒を呑む
春日遅々末広亭の入り具合
カフエ傳の池の田螺を見むとゆく

木村茂登子

茶室風景は取合せ抜群と思う。茶室に
を「へ」にすると臨場感が変わるかも。

平凡に見えるが「信濃に」が安心して
読める。

赤座典子

「身軽になりし」全くその通り。私も
2個持っている。重たいのは書架に入れ
たつきり、便利になったものだ。

「花衣」上野の花も見え遊心誘う。

安部里子

神奈川飯山温泉（坂東六番札所飯山観
音）のタニシ料理は有名だが、食べて旨
いとは思わなかった。まさに「肝だめし」
集中、結構東風吹くがあつたが吹くは
極力外したい。風は吹くものだから。

木村茂登子

強東風の滲み入るばかり喪にあれば
広々と陣取るシート花の下
ひとりにはずい分広し花筵
桜東風赤子の帽子ずらしをり
強東風や今朝は鴉も乾び声
啜り泣き広ごりてゆく卒業式
東風つよき一と日そろそろ灯さうか
東風の景電車警笛鳴らしあふ
耕して広がる四隅田んぼかな
無為のわが干潟広きにイちにけり
永き日に飽きたり田螺蓋を閉づ
櫻東風陶の狸のお出迎へ
朝東風やヴァイオリン抱へゆく少女
カフェ傳の池に田螺を棲まはせて
ぼうたんや京間八疊廣びろと
廣縁にひとりぼつりと日向ぼこ

定樞じょう

芝 尚子

春爛漫を満喫した様子が読者に伝わる。
俳句はそれで良いと思っっている。私、
商売上新宿末広亭とのつき合いは長く
五十数年になる。嘶家の仕草は随分見て
きた。忙しき世の中、寄席を覗く心の余
裕が羨ましいと思う。カフェ傳、ときには
挨拶句も花になり息抜きになる。

斉藤裕子

今年も幼稚園卒園式、小学校卒業式に
町会長として出席した。子供は別れを惜
しみ両親は子供の成長に嬉し涙。何時で
も新鮮な風景である。

定樞じょう

一日の終わり。安堵への祈りが見え、
「電車警笛」は共鳴による生活感の確認
であろうし、「わが干潟」は自身の心象
風景に見えて来る。「田螺」もまた。

芝宮須磨子

閉店の土間の広さや春寒し
強東風や坂上の駅足とられ
心の中にどすんとすわる東風ふく日
吉野桜枝の広さに年月を
広げおく花の下なるブルーシート
母親に似てきたらしい田螺鳴く

須賀敏子

髪の色変へてみやうか桜東風
新聞を広げたままで花の昼
見るだけの旅の広告弥生尽
スカートを広げたやうに落椿
農薬の犠牲になりし田螺かな

鈴木多枝子

歩かねば強東風に向け歩き出す
強東風に里の香がして来たり
朝東風に野球部員のランニング
広々と菜の花咲かせ海に出る
雲雀東風死んでませんと唄きこゆ

田中藤穂

芝 尚子

「陶の狸」「少女」は作者へのエネルギーとして脈うつ。「カフェ傳池」私も一度拝見せねば、淋しさは「ぼうたん」「日向ぼこ」にも見える。「少女」がこれからを支えることだろう。

芝庭須磨子

「閉店」多忙な時間が流れ忘れていた寒さが身に迫る。作者は人との出会いが好きなのだ。つまり商売に徹しているのである。語らぬが「心の中」を覆うものが気になる。

須賀敏子

年を取るとだんだん親に似てくると言われる。多く詠われるが、実感の強さを感じる。中ほどの「た」と「田」が韻を踏んだのも幸運と言える。

耳遠き二人連れらし桜東風
香煙の東風に広がりお縁日
広縁は花冷京都法然院
朝市に荷を広げたる春野菜
雨もよひ夕東風さわぐ露店商

長崎桂子

東風の昼歩幅ゆるゆるたんぼ道
養殖の田螺田楽そろりかむ
うららかや河原広々児が走る
つややかに古き広縁彼岸寺
干涸びず日々過ごしをり田螺鳴く
はればれと空仰がむと田螺這ふ
函館は坂多き街東風吹けり
広々と海淋しげに鷗鳴く
広告の紙でコラーージュ春を呼ぶ
夕東風や待たる人も待つ人も
花びらが迷ひ込んだる広廊下

早崎泰江

森山のりこ

鈴木多枝子

「農薬」が自然破壊につながる。由々しきことである。「タミフル」が子供を狂わせる現在、作者の叫びは尊い。

田中藤穂

雲雀健在はご自分の主張でもある。「耳遠き」は高齢の二人であろう。素姓もそれとなくつかめるし身につまされる。

長崎桂子

「雨もよひ」は慌ただしさを告げる。「露店商」が色彩まで感じさせるから妙である。

早崎泰江

「干涸びず」に前向きな姿勢が窺えるし「はればれ」にも現れる。「コラーージュ」の華やきも、自身を励まして。

花曇地図を広げる山の駅
眼を病みし曾祖母田螺口にせず
バスの旅田螺の道を教はりぬ
蝶生れ町へ鈴ふる広さかな

渡邊友七

さざなみや東風に押されて滞の水
泣く田螺相手ぞいづこ泥深し
耕して天に至れば田螺なく
初蝶の行く方天城の空広し
彗星の遠ざかりゆく田螺また
麻雀卓ほどの廣さに女郎蜘蛛
小父さんと連れになりたる東風の街
てつぺんのかわきはじめし田螺かな
春驟雨ちらし広告はりつきて
桜東風帰りの馬車に乗り遅れ
末広亭一番太鼓花ちるや
山峡ひの田螺料理や夜さりつつ

竹内弘子

佐藤喜孝

堀内一郎

森山のりこ

「夕東風」は出色と思う。中七、下五に哀感の情、人間愛があふれる。

「地図」「バスの旅」は解放の意。

渡邊友七

「鈴ふる」に初蝶の気負いが生々と感じられる。「天に至れば」に作者の今後が託されているようだ。

選句

結局は自分に分る句、好きな句を選ぶこととなるが、つくりものでない内容に真実の感じられる句を選んでもらいたい。

技巧や言葉だけにまどわされぬよう注意することである。

瀧 春一

あをキーワード俳句辞典(い)

胃

落味噌や胃の腑静かに引き締まる
胃袋の検査に挑む開戦日
胃袋をたてよこさかさ糸瓜生る
花を見る胃の錠剤を一粒もち
胃薬を飲み満月を探しに行く

異

不意に入る異時空世界夏の山
松飾る異国の町を通りけり
祝日の合はぬ異国の初暦
異次元にすうとゆけさう冬の月
離段に異国の人形並びをり

井

天井の黒き蜘蛛の巣二十五年
酒蔵の井戸の深さよ柿若葉
蓬摘井戸は海へとつづきけり
天井の分だけ曇明易し
白粉花や水遣り用の唧筒井戸

家

宵寒や灯らぬ家の影濃ゆし
家を出て来たと云はれし蠅叩
幾山河家霊とともに古式雛
家の裏十葉ばかりはびこりし
家を壊す一部始終を白木樅

遺影

遺影にすこし文句も言ひて柿供ふ
臆たけし人の遺影は微笑まず
葱坊主遺影抱く子の泣かれけり
春夕べ遺影笑ひてかなしまず
遺影の父笑うてみえし栗ご飯

言ふ

原爆忌言ひ出す母は背をのぼし
日向ぼこ子に諭すと猫に言ふ
足萎の彼が言ふ秋高きこと
子には子の言ひ分のあり夜寒かな
変り者と言はれつづけし銀竜草

篠田 純子

松本 米子

吉弘 恭子

渡邊 友七

田中 藤穂

芝宮須磨子

西本 春水

赤座 典子

安部 里子

森山のりこ

松村美智子

芝 尚子

鈴木多枝子

堀内 一郎

竹内 弘子

山莊 慶子

佐藤 喜孝

木村茂登子

吉成美代子

早崎 泰江

田中 藤穂

赤座 典子

定梶じょう

堀内 一郎

斉藤 裕子

鎌倉喜久恵

長崎 桂子

定梶じょう

須賀 敏子

森 理和

四月の句会

傳句会 中野区 カフェ傳

どこからか花びら二三池動く
 祖師堂のいちばん奥の桜かな
 山笑ふ寸又峡温泉眠だけに
 仕事着にこだはりのあり梨の花
 ここからは私道春泥の細い道
 ショパン聞く融け入りさうな春の蘭
 春宵や見知らぬ人と赤信号
 鉄棒にぶらさがりをり花ぶぶき
 行きずりにこゑかけあひし春の雷
 被災地のシートの青や花筵
 看経の中を笹鳴通り過ぎ
 ひなげしにホースの水を弱めたり
 やはらかきこちらの芹を摘まれよと
 藤穂

理和
 喜久恵
 敏子
 敦子
 茂登子
 尚子
 喜孝
 弘子
 恭子
 裕子
 寒林
 泰江
 藤穂

調句会 さいたま市岸町公民館

留めおきし新聞を繰る春愁
 新じゃがを皮ごと揚げて馳走とす
 あを林檎 中央区 京橋プラザ

開け閉めの小言がふえし二月かな
 冬の雨赤い傘さす通夜の客
 山独活をバリツと噛みて負けん気で
 笹鳴を打ち消す昼の寺の鐘
 楳のあへか紅あるひと日かな
 紅梅や明日より今日が良いものを
 落椿向きを変へたる錦鯉

弘子
 里子
 藤穂
 純子
 恭子
 東亜未
 喜孝

春燈や眞砂女きらひと云ふ人と
 桜蔭坂の中ほど芙美子の家
 ひやひやと頬に寄りくる桜東風
 副業は俵引です草の餅
 挿穂していちにち雲をとりこにす
 枇杷伐つて潮ぐもりなり安房の国
 連翹の明るさに泣く少女かな
 大國主神から卑弥呼へ届く早苗かな
 一葉の井戸冷やし瓜などしたし
 黄砂降る狼はいつも悪者

須磨子
 夏子
 尚子
 藤穂
 木枯
 多枝子
 寒林
 恭子
 喜孝
 理和

連句勉強会 毎月第1日曜
 中野坂上 佐藤喜孝
 (090-9828-4244)

傳句会 毎月第2火曜
 カフェ傳 森理和
 (03-3368-4263)

調句会 毎月第3木曜
 岸町公民館 竹内弘子
 (0488-86-3501)

あを林檎 八月第3日曜
 京橋プラザ
 篠田純子 (5250-2776)

七座句会 毎月第4火曜
 小川苑 吉弘恭子
 (090-9839-3943)

あを吟行会
 蓼科(七月)



五月二六日早朝、滅多に鳴らない携帯電話が鳴った。衛藤公子さんの夫君からであった。公子さんが血液ガンを五月十七日にお亡くなりになったという報せであった。公子さんとは二度お会いしている。一度はお母様の村田静枝さんと御一緒してお宅へお伺いした。だいぶ前のことである。もう一度は、静枝さんが行っていた喫茶店「傳」へ一度お伺いしたいということで句会の日にお見えになられた。句会の始まる前ちよっとお話しが出来た。その頃はもうご自身の身体のことはおわかりになっていたのだろうか。昨年一年「あを」の俳句からイメージを賑わませて巻頭を飾っていた。俳句はすべて公子さんがお選びになられた。十二月の作品を仕上げてホツとなされたと聞いた。夫君が行くと昨夜病室の窓からながめた月の話をよくされたそうである。公子さんは青白い月に向かって懸命に羽ばたいている鳥を描かれた。翼が三枚もある鳥である。三枚の翼は飛ばんとするねがいの強さであろうか。しかし飛ぶのを諦めたかのようにこの鳥は脚を二本垂れている。各月に選ばれた俳句に公子さんの思いが託されていると思えてきた。鳥に添えた十二月の句は「むずかしき日は海に出て月を見る 鎌倉喜久恵」であった。三月は母である静枝さんの俳句をしたため、自作の紅型とともに送られてきた。原作の感じをうまく伝えられなかったので機会をつくりみなさまに見てほしいと思っている。公子さんは私と同じ巳年。突然の訃報に無念の思いがつのる。

医師である夫君のかなしみは察して余りある。合掌。



まだ連句の会の名称が決まっていないが、難しいことは百も承知ではじめた。はじめてみて楽しいものだということを知りつつあるところ。先日「癒しの連句会」という本をもとめた。連句は俳句の孤の作業とは違つようだ。まだ読んでいないがそういう一面もありそうな予感がする。



今月の表紙も先月に続き白山吟行会で行つた白山神社で撮つた。お富士さんがあり起伏に富んだ地形に紫陽花が所狭しと咲いていた。政情なんと申してよいかかわらない本卦帰り状態。戦後がすべて御破算になつたようだ。紫陽花の藍色は静かで心にしみる。(喜孝)

二〇〇七年六月号

発行日 六月七日

発行所 東京都中野区中央2-50-3
電話 090-9828-4244

印刷・製本・レイアウト 佐藤喜孝 竹僊房
カット／恩田秋夫・松村美智子

表紙・佐藤喜孝
会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年
郵便振替 00130-6-55526(あを発行所)
乱丁・落丁お取替えます。